

随 想

「泌尿器科紀要」創刊20周年に際して

稲 田

務*

本誌編集者より、今年は創刊20周年に当たるので感想文を書くようにと言われ、一種の感慨を覚えた。そのような若い時代が筆者にもあったのかと、今更ながら驚くような感じ、茫々として記憶から消え失せんとしている事、昨日の事のように、はっきり浮かんで来る事柄など、様々である。過去というものは、本当に存在したのか、夢ではないのかと思うようなこともあるが、この場合には、出版物という証拠が蔵存しているので、夢幻であるとは言えない。そこで日記やメモ帳を取り出して、一文を書こうと思った。

京大に泌尿器科教室が新設せられ、筆者がその主任教授に任ぜられたのは昭和25年であるが、当時はまだ戦後の混乱状態が続いていた。わが国において泌尿器科教室または講座の独立している大学は極めて少なく、専門学会誌は「日本泌尿器科学雑誌」「皮膚と泌尿」だけで、その他には「皮膚科紀要」のごとく、誌名には泌尿器科の字はないが、内容には、それを含んでいるものが少数あった。大学以外の大病院にも泌尿器科専門科を掲げるものはほとんどなかった。その後、漸くに、専門科目としての泌尿器科学が注目され、学科目として、また診療科目としての独立を要する声が高まって来た。これと共に専門家の数も増し、研究論文も多くなり、専門誌の出現を必要とする状況が起こって来た。

昭和30年頃には世状も漸く安静となり、同年4月には、第14回日本医学会が京都にて開催されることになり、その分科会である日本泌尿器科学会総会の会長を筆者が受けることになり、筆者の教室もやや体裁を整えつつあったので、この機会に何か有意義の仕事をしたいと考え、専門誌の刊行を思い立ったのである。

初めて発刊の相談を行ったのは昭和29年9月29日で、集ったのは加藤篤二、多田 茂、石神襄次、後藤 薫の諸氏と筆者であり、来年3月までに創刊号を発行することを決めた。その後、会する者は一様ではなかったが、編集会議を度々開いて要点を決めて行った。

学術誌の印刷業は、京都では、まだ不十分な状態であったので、ある縁故によって仙台市の笹気印刷所に依頼した。誌名を決定し、創刊号には当教室員の論文

を掲載し、これを4月の日本泌尿器科学会の際に供覧し、会員を募集し、第1年度にはとに角4冊を発行する事、発行用務は主として後藤薫君に担当してもらう事などを決めた。

創刊後の原稿に最後の目を通し、昭和30年1月10日に印刷所へ渡した時には肩の荷が下りた感じであった。3月22日に待望の創刊号が到着した。4月1日、日本医学会開会式、2日、日本泌尿器科学会総会開会である。この時に創刊号を会員諸氏のお目にかけることが出来た。

以来、会員数は増加の一路をたどり、掲載論文もほとんど全国の大学、病院の泌尿器科専門医師から寄せられるに至った。その間、第1年は4冊、第2年は6冊と発行し、第3年（昭和32年）以後は毎月発行となった。第2巻4号（昭和31年7月号）より印刷所が現在の山代印刷会社に変更した。編集、発行の用務は後藤薫君、仁平寛巳君、酒徳治三郎君と承継がれた。

本誌は学会の機関誌ではないので、特徴として、肩の凝らぬ、自由な雰囲気盛りを盛り込むことが出来た。その例としては、毎号巻頭に随想欄を設け、専門家の気楽な文章を次々に掲げた。これがなかなか人気を博して、早く自分にも執筆させよとの申し出が続いた。また毎号編集後記に力を入れた。多方面にわたって忌憚のない意見を述べたが、卒直過ぎるのもあったかも知れぬ。臍曲がりを承知の上で、片仮名で書いたり、句点は打ったが読点を打たずに、その代りに一字割空けたりした。取り上げた問題は多様で、その主なものを挙げると、泌尿器科独立、専門医制度、インターン制度、大学病院と健保、医学研究費、医療制度、勤務医の待遇、学術会議、新制大学院、無給医局員、学会、論文の文字、人事移動、身辺雑記、その他である。これは筆者の「随想集」に集録してある。大体に、初期には比較的におだやかな筆法であったが、段々にザックバラン、エゲツナクなっている。軍備を減らして医療費に廻せとか、厚生省、医師会、政治家等を槍玉にあげている。妄言多謝と付言を要するであろう。

やがて昭和42年3月に筆者は定年となって本誌と別れ、その後は新しい編集者によって承継がれた。今後はいつまでも一層輝かしい発展を遂げて行くことを祈るばかりである。

(原文のまま)

* 京都大学名誉教授（泌尿器科学）